

福音書における「イエス自身のことば」を探る

(2) イエスの譬から

藤 本 十四秋¹, 名木田 恵理子²

A Search for the Words That Jesus Really Said by Reference to 'The Five Gospels'

(2) The Parables of Jesus

Toyoaki FUJIMOTO¹ and Eriko NAGITA²

キーワード：イエスのことば，イエスの譬，福音書：マルコ，マタイ，ルカ，トマス

概 要

イエスは多くの譬を語って^{たとえ}いて，福音書(マルコ，マタイ，ルカ，トマス)の中から「イエスの譬」に該当するものを拾いあげてみると37話にのぼる。それらのうち，本当にイエスの口から語られたものはどれかを知るため，The Jesus Seminar: The Five Gospels に準拠して福音書の譬を検討した。その結果，イエス自身のことばと判定されるもの，および，おそらくイエスのことばであろうとされるものは22話であり，福音書語録の他の部分と比べ，譬で語られたイエスの教えが真正イエスのことばとして大きなウエイトを占めていることが分かる。そこでのイエスの語りは斬新で意表を衝くものがあり，人々に耳を傾けさせたことを窺わせる。特に，ここでは，マタイ13章の「御国をたとえと」で一括される7話と，ルカ特有の「よいサマリア人」，およびマタイ特有の「ぶどう園の労働者たち」を取り上げ，イエスのことばについての分析を行っている。

1. 緒 言

この前編に当たる報文では，イエスのことば(言葉)を「山上の説教」(マタイ5-7章)の中で分析した¹⁾。本稿は，同じ趣旨で「イエス真正のことば」を，福音書の中で語られている譬(以下，たとえと記す)に探るものである。その際，前報と同様，The Jesus Seminar: The Five Gospels²⁾に基づいて検証した。

イエスはさまざまなたとえを語っている。たとえは具体的であり，強い印象を与えうるゆえに，教えを理解させるうえで有効な方法であった。そして，口承されていた多くのたとえは，各福音書の編集段階でそれぞれに適切な状況を

設定され，また時代や編集者の思想を反映しながら構築されていった。そこで，当然のことながら，イエスのことばとして語られているたとえにも，改変や別な箇所への移動や，またまったく新しいものの追加があったと考えられる。

表1は，マタイ福音書に出てくる順序に従って，各福音書でのたとえの掲載状況をまとめたものである。これを見ると，マルコ福音書，マタイ福音書，ルカ福音書，トマス福音書(以下，それぞれ，マルコ，マタイ，ルカ，トマスとよぶ)に共通に記載されているものの外に，ルカに特有のたとえも多く，また収録がマタイのみのたとえもあることが分かる。

表2は表1をもとに，前記 The Jesus Seminar (以下，セミナーと呼ぶ)に準拠して，「たとえ」を以下の4つの分類に分けたものである。その結果，第一分類：イエス真正のことば5話，第二分類：イエスのことばと推定されるもの17話，第三分類：イエスのことばではないが，イエスの思想に基づくもの6話，第四分類：聖書の編集者の創作によるもの9話となっている。前報

(平成10年9月17日受理)

¹⁾川崎医療短期大学 第一看護科，²⁾川崎医療短期大学 一般教養

¹⁾The First Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

²⁾Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

表1 イエスの譬 (説明は下段)

	マタイ	ルカ	マルコ	トマス
良い木と悪い木	7:16-20	6:43-45		45:1-4
岩の上の家と砂の上の家	7:24-27	6:47-49		
新しい布切れと古い着物	9:16	5:36	2:21	47:5
新しいぶどう酒と古い皮袋	9:17	5:37-38	2:22	47:4
種まき	13:3-8	8:5-8	4:3-8	9:1-5
毒麦	13:24-30			57:1-4
からし種	13:31-32	13:18-19	4:30-32	20:1-4
パン種	13:33	13:20-21		96:1-2
畑に隠された宝	13:44			109:1-3
美しい真珠	13:45-46			76:1-2
投げ網	13:47-48			8:1-3
ぶどう酒蔵	13:52			
迷った羊	18:12-13	15:4-6		107:1-3
負債を許してもらった僕	18:23-34			
ぶどう園の労働者たち	20:1-16			
二人の息子	21:28-31			
ぶどう園の悪しき農夫たち	21:33-39	20:9-15	12:1-8	65:1-7
祝宴への招待	22:2-13	14:16-24		64:1-12
忠実な家令	24:45-51	12:42-48		
10人の乙女	25:1-12			
金を託された僕たち	25:14-29	19:12-27		
羊とやぎを分ける	25:31-46			
金を借りたふたりの人		7:41-43		
よいサマリア人		10:30-37		
真夜中に訪ねてくる友		11:5-8		
愚かな金持ち		12:16-21		63:1-3
目を覚ましている僕		12:35-40		
実のならないいちぢくの木		13:6-9		
婚宴の上座		14:7-14		
費用の計算		14:28-33		
なくした銀貨		15:8-10		
放蕩息子		15:11-32		
不正な家令		16:1-8		
金持ちとラザロ		16:19-31		
主人と僕		17:7-10		
未亡人と裁判官		18:2-5		
パリサイ人と取税人		18:10-14		

表中、アンダーラインのついたゴチック文字は第一分類 (真正イエスの言葉)

ゴチック文字は、第二分類 (おそらくイエスの言葉)

細字は、第三分類 (イエスに基づいてはいるが、イエスの言葉ではない)

イタリック字は第四分類 (聖書編集者の創作)

で「山上の説教」の中のイエスのことばが必ずしもすべてイエスによるものではないことを述べたが、これによって、たとえもまたイエスの口から出たものばかりではないということが分かる。

例えば、御国(Heaven's imperial rule, 福音書によっては、神の国、父の国とも訳されている)について、イエスは、マタイ13章において

7つのたとえで説明している。すなわち、毒麦、からし種、パン種、畑に隠された宝、美しい真珠、投げ網、ぶどう酒蔵、のたとえである。ところが、セミナーによると、この中で、実際にイエスのことばと判定されるものは4つであり、毒麦のたとえ、および投げ網、ぶどう酒蔵のたとえはイエスの教えに基づいて後世の編集者が創作したものだといっているのである。

表2 イエスの譬の四分類

第一分類：イエス真正のことば（5話）	
からし種	トマス 20:1-4 (マタイ 13:31-32, ルカ 13:18-19, マルコ 4:30-32)
パン種	マタイ 13:33, ルカ 13:20-21 (トマス 96:1-2)
ぶどう園の労働者たち	マタイ 20:1-16
よいサマリア人	ルカ 10:30-37
不正な家令	ルカ 16:1-8
第二分類：おそらくイエスによると判断されることば（17話）	
良い木と悪い木	マタイ 7:16-20, ルカ 6:43-45, トマス 45:1-4
新しいぶどう酒と古い皮袋	ルカ 5:37-38, マルコ 2:22, トマス 47:4 (マタイ 9:17)
種まき	マタイ 13:3-9, ルカ 8:5-8, マルコ 4:3-8, トマス 9:1-5
畑に隠された宝	マタイ 13:44, トマス 109:1-3
美しい真珠	マタイ 13:45-46, トマス 76:1-2
迷った羊	マタイ 18:12-13, ルカ 15:4-6 (トマス 107:1-3)
負債を許してもらった僕	マタイ 18:23-34
ぶどう園の悪しき農夫たち	トマス 65:1-7 (マタイ 21:33-39, ルカ 20:9-15, マルコ 12:1-8)
祝宴への招待	ルカ 14:16-24, トマス 64:1-12 (マタイ 22:2-13)
金を託された僕たち	マタイ 25:14-29, ルカ 19:12-27
真夜中に訪ねてくる友	ルカ 11:5-8
愚かな金持ち	ルカ 12:16-21, トマス 63:1-3
実のならないいちぢくの木	ルカ 13:6-9
なくした銀貨	ルカ 15:8-10
放蕩息子	ルカ 15:11-32
未亡人と裁判官	ルカ 18:2-5
パリサイ人と取税人	ルカ 18:10-14
第三分類：イエスに基づいていることば（6話）	
新しい布きれと古い着物	マタイ 9:16, ルカ 5:36, マルコ 2:21, トマス 47:5
毒麦	マタイ 13:24-30, トマス 57:1-4
二人の息子	マタイ 21:28-31
10人の乙女	マタイ 25:1-12
目を覚ましている僕	ルカ 25:1-12
金持ちとラザロ	ルカ 16:19-31
第四分類：記者・編者の創作によることば（9話）	
岩の上の家と砂の上の家	マタイ 7:24-27, ルカ 6:47-49
投げ網	マタイ 13:47-48, トマス 8:1-3
ぶどう酒蔵	マタイ 13:52
忠実な家令	マタイ 24:45-51, ルカ 12:42-48
羊とやぎを分ける	マタイ 25:31-46
金を借りたふたりの人	ルカ 7:41-43
婚宴の上座	ルカ 14:7-14
費用の計算	ルカ 14:28-33
主人と僕	ルカ 17:7-10

本稿で検証の対象とするのは、前記マタイ13章に含まれる、およそ「神の国のたとえ」として概括できるたとえとその解説、および、1つの福音書にしか収録されていないにもかかわらず、セミナーによってイエスが本当に言ったことばであるという判断が与えられている「よいサマリア人」(ルカ10:30-37)と「ぶどう園の労働者たち」(マタイ20:1-15)である。

なお福音書からの文面・引用は The Five Gospels の英文を使い、日本語訳はその英文に基づいて筆者らが行った。また、その英文および日本語訳において字体はセミナーの判定を表している。すなわち、第一分類：アンダーライン付太字、第二分類：太字、第三分類：細字、第四分類：イタリック体である(前出)。

2. マタイ13章についての検証

- (1) 種まきのたとえ(マタイ13:3-8, ルカ8:5-8, マルコ4:3-8, トマス9:1-5)

マタイ 13:3-8

³He told them many things in parables:

This sower went out to sow. ⁴While he was sowing, some seed fell along the path, and the birds came and ate it up. ⁵Other seed fell on rocky ground where there wasn't much soil, and it came up right away because the soil had no depth. ⁶When the sun came up it was scorched, and because it had no roots it withered. ⁷Still other seed fell among thorns, and the thorns came up and choked them. ⁸Other seed fell on good earth and started producing fruit: one part had a yield of one hundred, another a yield of sixty, and a third a yield of thirty.

³彼は彼らにたとえで多くのことを語った。

この種まく人が種をまきに行った。⁴彼が種をまいているあいだに種が道に落ちた。そして鳥が飛んできてそれを食べた。⁵別な種が土のあまりない岩場に落ちた。そして土が深くないためにその種はすぐに芽を出した。⁶太陽が昇ってくるとそれは焼かれた。そして根がなかったので、枯れてしまった。⁷また別な種が茨のあいだに落ちた。茨がはえてきて塞いでしまった。⁸ほかの種は肥沃な土地に落ちて、実を結んでいった。そしてあるものは100倍、またあるものは60倍、あるものは30倍の収穫をもたらした。

このたとえはマルコ4:3-8, マタイ13:3-8, ルカ8:5-8, トマス9:1-5に収録されているが、マタイとルカの採取源はマルコだと判定されている。マタイのたとえは、最後の倍数表現が逆列(100倍, 60倍, 30倍)になっているだけで、マルコとほとんど同じであり、ルカの文章は、マタイ、マルコに比べて簡潔になっているが、やはりマルコの痕跡を残している。トマスは独自の採取で、他の3福音書と比べて異なった形になっている。

このたとえはどの福音書のものも、(1)道に落

ちた種 — 鳥に食べられた、(2)岩場に落ちた種 — 枯れてしまった、(3)茨の中に落ちた種 — 塞がれてしまった、というように、三部方式で語られている。そして、肥沃な土地に落ちた種が実を結び、30倍, 60倍, 100倍になったというところもやはり三部形式である。

三部形式はイエスの語りに特徴的であり、またこのたとえが複数の福音書に共通して残されていることなどから、おそらくイエス本人の言であるとされている。

しかし、セミナーの判定の内訳は分かれている。すなわち、このたとえを真正イエスのことばとするグループと、4つの福音書の比較から伝承の過程で修正された可能性があるので、イエスのことばとは断定できないとするグループ、ヘレニズム伝承からイエスの言い伝えに引用されたもので第四分類だとするグループに分かれた。そこで、集計の結果は第二分類の「おそらくイエスのことばであろう」というものになったのである³⁾。

このたとえのあと、マルコ4:14-20, マタイ13:18-23, ルカ8:11-15で、種まきのたとえについての解釈が詳しく加えられている。その中ではおおよそ「種まきは御ことばを蒔くことで、道ばたに落ちた種は悪いものがきて奪っていき、岩場に落ちた種は根がないのですぐにつまづき、茨の中に落ちた種は富やよこしまな考えでつぶされる。よい土地に蒔かれた人は御ことばを理解する」と解説されている。この解説はマルコがオリジナルで、それをマタイやルカが取り入れたものとされている。しかし、トマスがそうであるように、もともとイエスのたとえは解説などなく、ばらばらに語られ伝えられていたものである。ここにあるような解釈部分は、マルコ、マタイ、ルカともに、編集者の創作によるものとみなされている。

- (2) 毒麦のたとえ(マタイ13:24-30, トマス57:1-4)

マタイ 13:24-30

²⁴He spun out another parable for them:

Heaven's imperial rule is like someone who sowed good seed in his field. ²⁵And while everyone was asleep, his enemy came and scattered

weed seed around in his wheat and stole away.
²⁶And when the crop sprouted and produced heads, then the weeds also appeared. ²⁷The owner's slaves came and ask him, "Master, didn't you sow good seed in your field? Then why are there weeds everywhere?" ²⁸He replied to them, "Some enemy has done this." The slaves said to him, "Do you want us then to go and pull the weeds?" ²⁹He replied, "No, otherwise you'll root out the wheat at the same time as you pull the weeds. ³⁰Let them grow up together until the harvest, and at harvest time I'll say to the harvesters, 'Gather the weeds first and bind them in bundles to burn, but gather the wheat into my granary.' "

²⁴彼は別なたとえを彼らのために語りだした。

御国は自分の畑によい種をまいた人のようなものだ。²⁵みんなが眠っているあいだに、その人の敵がやってきて麦の中に毒麦を蒔き散らし、逃げ去った。
²⁶麦が茎を出し、穂を出したとき、毒麦もまた現われた。²⁷その所有者の僕たちがやってきて彼に尋ねた。「ご主人さま、ご自分の畑によい種を蒔かなかったのですか。それなら、なぜいたる所に毒麦がはえているのですか」²⁸彼は答えて言った。「敵がこんなことをしたのだ」僕たちは彼に言った。「私どもが行って毒麦を引き抜くことをお望みですか」²⁹彼は答えた。「いや、毒麦を引き抜くときに同時に麦の方も抜いてしまうだろう。³⁰収穫の時までいっしょに成長させなさい。そして、収穫の時に刈り入れ人たちに私はこういだろう『まず毒麦を抜き集めて束にしてくり、焼きなさい。小麦の方は私の倉に集めなさい』と」

これは、麦の中に毒麦も混じって育つと、それらは始めのうちはよく似ていて見分けがつかないという身近な例を題材にしたたとえで、現在における善悪の共存と、最終的な善悪の選別について語っている。セミナーは、このたとえを、イエスの口から出たものではないが、イエスに基づくもの(第三分類)としている。

このたとえはトマス 57: 1-4 にも収録されているが、トマスでは非常に簡単な語りとなっている。セミナーはトマスの方も第三分類に評価

している⁴⁾。また、これは、マタイとトマスの両方にあることから、口承の頃からあったと推測される。

このたとえの、人間が善悪を性急に識別することはできない、裁きは神にゆだねねばならないとする点は、イエスの思想に沿っている。ただ、マタイでは、次のからし種、パン種のたとえのあとに、このたとえの解釈が加えられている(13:37-43)。その解釈は他の福音書にはないもので、マタイは毒麦のたとえの後半(刈り入れのときのよい麦、悪い麦の選別)にポイントを置いている。

それによると、「畑」は「世界」、「よい種」は「御国の子」、「毒麦」は「悪い者」、「敵」は「悪魔」、「収穫」は「世の終わり」、「刈る者」は「御使い」であり、この世の終わりには悪い者たちはことごとく炉の火に投げ入れられる(最後の審判)というのである。このように、自らを善、他を悪とする排除の図式が反映しているところは、イエス本来の教えにみられるものではない。そこには初期キリスト教社会の、他の社会、あるいは教会内の「墮落した者たち」に対して自らを差別化しようという意図が想定できる。イエスに関連していることばではあるが、後世の創作とするセミナーの判断は妥当なものであろう。

(3) からし種のたとえ(マタイ13:31-32, ルカ13:18-19, マルコ4:30-32, トマス20:1-4)

これは、4つの福音書すべてに挙げられている。このたとえはマタイ、ルカでは次のパン種のたとえと並べられているが、マルコにはパン種の方はなく、トマスでは2つが別々な箇所に収録されている。本来別々の場にあった2つのたとえが、内容が似ているので、伝承の早い段階で結びついたものと思われる。

マタイ 13:31-32

³¹He put another parable before them with these words:

Heaven's imperial rule is like a mustard seed, which a man took and sowed in his field.

³²Though it is the smallest of all seeds, yet, when it has grown up, it is the largest of

garden plants, and becomes a tree, so that the birds of the sky come and roost in its branches.

³¹彼はまた別なたとえを示して次のようなことばを發した。

御国は一粒のからし種のようなものだ。一人の人がそれをとって、自分の畑に蒔いた。³²それはすべての種の中でも最も小さいものであるが、成長して庭の草木の中で一番大きくなり、木となる。その結果空の鳥がやってきて、大枝の中に巢を作る。

このたとえに対応することばは、他の福音書では次のようになっている。

マルコ 4:30-32

³⁰And he would say:

To what should we compare God's imperial rule, or what parable should we use for it? ³¹Consider the mustard seed: When it is sown on the ground, though it is the smallest of all the seeds on the earth, ³²—yet when it is sown, it comes up, and becomes the biggest of all garden plants, and produces branches, so that the birds of the sky can nest in its shade.

ルカ 13:18-19

¹⁸Then he would say:

What is God's imperial rule like? What does it remind me of? ¹⁹It is like a mustard seed which a man took and tossed into his garden. It grew and became a tree, and the birds of the sky roosted in its branches.

トマス 20:1-4

The disciples said to Jesus, "Tell us what Heaven's imperial rule is like" ²He said to them,

It's like a mustard seed. ³<It's> the smallest of all seeds, ⁴but when it falls on prepared soil, it produces a large plant and becomes a shelter for birds of the sky.

解釈としては、一粒のからし種(=福音)が、大きく広がって行き、世界をおおうというものである。また、このたとえは、4つの部分から成る。すなわち、(1)神の国は一粒のからし種の

ようなものである。(2)それがよく耕された畑に蒔かれた。(3)成長して大きな草になった。(4)空の鳥たちにとってが羽を休める場所となった。

このたとえは、マタイ、ルカの両方においてQを採取源としている(Qとは、マタイ、ルカ両福音書が基づいたとされるイエス伝承語録資料である)。また、マルコ、トマスにも収録されていることから、まずイエスのことばに間違いないと判断される。セミナーはこの中で特に、本当にイエスのことばと断定できるものは、トマス 20:1-4(前掲)であると言っている。それは、最も簡潔な形で伝えられているからである⁵¹。

マタイ、ルカ、マルコがイエスのことばであるという断定に至っていないのは、まず、マルコは説明的で長く、口伝のあとが薄れている。次に、マタイ、ルカは簡明で口伝的だが、前記(3)の部分にイエスのことばと断定できない要素が入ってきている。すなわち、マタイ、マルコ、ルカでは、小さいものを意味するからし種が大きく育って「木になる」としているからである。「木になる」ということばは、旧約聖書のエゼキアル書(17:22-23)やダニエル書(4:12, 20-22)の、そびえたつ帝国の隠喩としての木のたとえ⁵²につながっていく。そこで、聴衆に「神の国」が巨大な帝国になるという思いを抱かせる。イエスは、からし種が表す神の国を、そのような世界帝国というイメージで表そうと思ったのではないだろう⁷¹。

(4) パン種のたとえ(マタイ 13:33, ルカ 13:20-21, トマス 96:1-2)

マタイ 13:33

³³He told them another parable:

Heaven's imperial rule is like leaven which a woman took and concealed in fifty pounds of flour until it was all leavened.

³³彼は彼らに別なたとえを語った。

御国はパン種のようなものだ。一人の女がそれを取って50ポンドの小麦粉の中に隠した。それはついに全部発酵した。

このたとえはマタイとルカにおいてはほとん

と同じであり、同一の採取源（Q）から採られていることが窺われる。また、トマスにも同様のたとえが存在していること、たとえが明確、簡潔であり、口伝の特徴がでている点からイエスのことばだと断定された。

このパン種のたとえは象徴的である。まず、パン種はユダヤ人社会では「腐敗、邪悪」のシンボルであった。たとえば、過越の祭では神殿にパン種を入れないパンが捧げられ、各家庭でもパン種を取り除いて清めた。イエスはここではそれにより意味を与え、御国にたとえている。イエスのたとえの特徴として、あることばについて一般的に言われていることとは反対の意味を与えることによって、意表を衝く面がある。

次に、パン種を小麦粉の中に「隠す」という行為である。普通は隠すという表現はしない。ここでの常識はずれの表現も、これがイエスのことばであるという裏付けになっている。

さらに、50ポンドの小麦粉というのは、旧約聖書の創世記18章で、アブラハムの妻サラが老齢にもかかわらず子供を授かると言われたとき、御使いに50ポンドの小麦粉でケーキを作るように言われたことを思い出させる。つまり、50ポンドというのは、神の御わざの現われを祝うときの量だという連想が働き、ここに驚きとともに、神の国の出現がイメージされるのである⁸⁾。

ただ、トマスが他の福音書と違ってイエスのことばとしての支持が低いのは、²*She took a little leaven, [hid] it in dough, and make it into large loaves of bread.* というように、「少量の(a little)」パン種が「大量の(large loaves)」パンになったという表現による。これについてセミナーは、大小の対比にトマス独自の意図が感じられるとしている⁹⁾。

- (5) 畑に隠された宝、美しい真珠のたとえ（マタイ 13:44-46、トマス 109:1-3, 76:1-2）
マタイ 13:44-46

⁴⁴*Heaven's imperial rule is like hidden in a field: when someone finds it, that person covers it up again, and out of sheer joy goes and sells every last possession and buys that field.*

⁴⁵*Again, Heaven's imperial rule is like some trader looking for beautiful pearls. ⁴⁶When that merchant finds one priceless pearl, he sells everything he owns and buys it.*

⁴⁴御国は畑に隠された宝のようなものだ。誰かがそれを見つけると、その人はそれを再び隠しておいて大喜びのあまり行って、すべての財産を売り払い、その畑を買う。

⁴⁵また、御国は美しい真珠を探している商人のようなものである。⁴⁶その商人は1個のたいへん高価な真珠を見つけると、自分が所有しているものをことごとく売ってそれを買求める。

「畑に隠された宝」と「美しい真珠」のたとえは、主旨がよく似ていることからマタイでは並べられているが、トマスでは別々に収録されている（「隠された宝」109:1-3、「美しい真珠」76:1-2）。本来はトマスのように別個に語られていたものであろう。

「宝」や「真珠」はユダヤ社会で「知恵」を象徴するものであった。知恵を手に入れるとその他一切を放棄するという内容はイエスの教えとして適っている。また、短く簡潔な言い方に口伝の特徴が現われていること、畑に隠された宝や真珠を手に入れるために、すべての財産を手放すというような誇張した言い方が、イエスのたとえに特徴的な手法であることから、おそらくイエスのことばであろうという判断が下されている¹⁰⁾。

- (6) 投げ網のたとえ（マタイ13:47-48、トマス 8:1-3）

マタイ 13:47-48

⁴⁷*Once more: Heaven's imperial rule is like a net that is cast into the sea and catches all kinds of fish. ⁴⁸When the net is full, they haul it ashore. Then they sit down and collect the good fish into baskets, but the worthless fish they throw away.*

⁴⁷さらにもう一つ、御国は、海に投げ入れられあらゆる魚を捕える網のようなものである。⁴⁸網がいっぱいになると、人々はそれを岸に引き上げる。それから彼らはすわってよい魚をかごの中に入れ、価

値のない魚を投げ捨てる。

トマスとマタイの2つの福音書に収められているのにもかかわらず、このたとえはイエス自身のことばではないとされている。それはまず、マタイの good fish/worthless fish といった善悪の分別がイエス的ではないからである。そこには、マタイの特徴でもある初期のキリスト教に見られた「終末論」的選別意識が認められる。また、マタイはこのたとえの後に次のように続けている（マタイ13:49-50）。

⁴⁹このようにして今の世が終わりになるのであろう。神の御使いがやってきて正しい人たちから悪人を選び分け、⁵⁰彼らを火の燃えている炉に投げ込むであらう。そこで、その者たちは泣いたり、歯を食いしばったりするであらう。

この解釈は、前述の「毒麦のたとえ」と同じである。すなわち、最後の審判のとき、御使いがやってきて、悪しき者を火の炉に投げ込むというものである。むろんこれらはイエスの口から出たことばとは認められない。

トマスでは、a fine large fish/little fish というように大小の対比になっている。これは「少しのパン種からたくさんパン」（96:1-2）にもあるように、トマスに特徴的なものと言える。トマスにはマタイのような終末論的意味は特にないのである。

(7) ぶどう酒蔵のたとえ

マタイ 13:52

⁵²He said to them, “That’s why every scholar who is schooled in Heaven’s imperial rule is like some toastmaster who produces from his cellar something mature and something young.”

⁵²彼は彼らに言った「そういうわけで御国で学ぶ学者はみな、自分の貯蔵室から熟成したものも仕込んだばかりのものも取り出せる、宴会の主のようなものだ」

これは、13章での一連のたとえのしめくくりとして語られているものであり、マタイによっ

てこの場に加筆されたものと見なされる。

3. ルカのみ収録されている「よいサマリア人」についての検証

ルカ 10:30-35

³⁰Jesus replied:

There was a man going from Jerusalem down to Jericho when he fell into the hands of robbers. They stripped him, beat him up, and went off, leaving him half dead. ³¹Now by coincidence a priest was going down that road; when he caught sight of him, he went out of his way to avoid him. ³²In the same way, when a Levite came to the place, he took one look at him and crossed the road to avoid him. ³³But this Samaritan who was traveling that way came to where he was and was moved to pity at the sight of him. ³⁴He went up to him and bandaged his wounds, pouring olive oil and wine on them. He hoisted him onto his own animal, brought him into an inn, and looked after him. ³⁵The next day he took out two silver coins, which he gave to the innkeeper, and said, “Look after him, and on my way back I’ll reimburse you for any extra expense you have had.”

³⁰イエスが答えた。

ある男がエルサレムからエリコへと歩いていたところ、盗賊の手に落ちてしまった。盗賊どもは彼の着衣をはぎ取り、打ちすえ、半殺しにしたまま放置して逃げ去った。³¹さて偶然にも一人の祭司がその道をやってきた。祭司は彼を見ると道からはずれて彼を避けて行った。³²同様にレビ人がその場にやってきて、彼に一瞥をくれたが、道の反対側へ歩いて行って彼を避けた。³³ところがその方向に旅をしているサマリア人がいて、彼がいる所へやってきて、彼の状態を見て同情した。³⁴サマリア人は彼のところに近寄り、オリーブ油とワインをかけ、傷に包帯をまいた。サマリア人は自分の家畜に彼を乗せて宿屋へ連れて行って、面倒をみた。³⁵次の日、サマリア人は2枚の銀貨を出して宿屋の主人に渡して言った「この人の面倒をみてあげてください。あなたが使った余分な費用に対しては帰りに支払います」

これはルカにのみ見られるイエスのことばである。このたとえには次のようないきさつがある。ある律法学者がイエスとの問答で、「心をつくし、全霊をつくし、全力をつくして神を愛し、また自分と同じように隣人を愛しなさい」という教えに行き当たった（ルカ10:25-28）。この場面は、マルコ 12:28-34、マタイ 22:34-40にもある。「隣人愛」は当時よく知られていた教えであり、異なった状況のもとに、マルコ、マタイ、ルカに記載されていることから、この一般的な教えをそれぞれの福音書が適宜取り入れたものと考えられる。

ところで、ルカにおいてのみ、このあとさらに、律法学者の質問—「隣人とはだれのことか」が続く（10:29）。これが次の「よいサマリア人」のたとえの導入部となっている。律法学者は、イエスが「隣人とはイスラエルの民である」と答えることを予想して、尋ねたのである¹¹⁾。ところがイエスは予想に反して「よいサマリア人」のたとえを答えとして語った。イエスはサマリア人のたとえによって、はっきりと既成概念を覆えしているのである。

盗賊によって瀕死の状態にさせられた旅人（おそらくはユダヤ人）がいる。律法の守り手としての地位を与えられている祭司とレビ人（神殿で祭司の補助をする人）は彼を助けず、ユダヤ人から蔑まれているサマリア人が助けるのである。これは、だれが隣人かなどと尋ねる前に、敵味方の区別なく、神の前に等しく愛せよという意味を持っているたとえである。ルカにしか収録されていないサマリア人のたとえがセミナーによってイエス自身のことばという判定を得ているのは、こういった点によるものであろう。

4. マタイのみに収録されている「ぶどう園の労働者たち」についての検証

マタイ 20:1-16

For Heaven's imperial rule is like a proprietor who went out the first thing in the morning to hire workers for his vineyard. ²After agreeing with the workers for a silver coin a day he sent them into his vineyard.

³And coming out around 9 A.M. he saw others loitering in the marketplace ⁴and he said

to them, "You go into the vineyard too, and I'll pay you whatever is fair." ⁵So they went.

Around noon he went out again, and at 3 P.M., and repeated the process. ⁶About 5 P.M. he went out and found others loitering about and says to them, "Why did you stand around here idle the whole day?" ⁷They reply, "Because no one hired us." He tells them, "You go into the vineyard as well."

⁸When evening came the owner of the vineyard tells his foreman: "Call the workers and pay them their wages starting with those hired last and ending with those hired first."

⁹Those hired at 5 P.M. came up and received a silver coin each. ¹⁰Those hired first approached thinking they would receive more. But they also got a silver coin apiece. ¹¹They took it and began to gumble against the proprietor: ¹²"These guys hired last worked only an hour but you have made them equal to us who did most of the work during the heat of the day."

¹³In response he said to one of them, "Look, pal, did I wrong you? You did agree with me for a silver coin, didn't you? ¹⁴Take your wage and get out! I intend to treat the one hired last the same way I treat you. ¹⁵Is there some law forbidding me to do with my money as I please? Or is your eye filled with envy because I am generous?"

¹⁶The last will be first and the first last.

なぜならば、御国は自分のぶどう園で働く労働者を雇いに出かけた農園主のようなものである。²1日に銀貨1枚という報酬で労働者と折り合った後、彼は彼らを自分のぶどう園に送った。

³そして午前9時頃出かけて行って市場でぶらぶらしている男たちを見て、⁴彼らに言った。「あなた方もぶどう園に行きなさい。そうすればそれなりのものを支払います」⁵そこで男たちは行った。

正午頃と午後3時頃にも彼は出かけて行った。そして同じことを繰り返した。⁶5時ごろ彼は出かけて行ってぶらぶらしている男たちを見つけて言った。「なぜ一日中このあたりで何もしないで立っていたのですか」⁷彼らは答えた。「なぜなら誰も私たちを雇

ってくれなかったからです」農場主は彼らに言った。
「あなた方もぶどう園に行きなさい」

⁸夕方になってぶどう園の所有者は管理人に言う。
「労働者たちを呼びなさい。そして最後に雇われた
人から始めて最初に雇われた人で終わるように賃金
を支払いなさい。」

⁹5時に雇われた男たちが来てそれぞれ1枚の銀貨
を受け取った。¹⁰最初に雇われた男たちは自分たちは
もっと貰えるだろうと思って近づいてきたが、彼ら
もまた1枚の銀貨を貰った。¹¹彼らはそれを受け取っ
て、その農場主にあつづつ言い始めた。¹²「最後に雇
われた奴らは1時間しか働かなかったのに、あなたは
日中暑い間の仕事をほとんどすべてした俺たち
と同じように扱った」

¹³彼はその中の一人に答えて言った。「なあ、友よ。
私が君に悪いことをしたかい？ 君は銀貨1枚で私
と同意したではなかったか？ ¹⁴君の賃金を受け取っ
て出ていきなさい。私は最後に雇った者をあなた方
と同じに扱うという気があるのだ。¹⁵私が自分の気
にように私の金を使うのを禁じる法があるのか
ね？ それとも私が気前よくしているのでねたまし
いのかね？」

¹⁶このように、後の者は先になり、先の者は後にな
るであろう。

このたとえも、他の福音書に対応する記載は
ない。なぜマタイにしか伝えられていないこの
たとえが、「本当にイエスが言ったことば」だと判
断されているのだろうか。

このたとえは当時の社会常識でいってもま
たく理にあわないものである。まる1日働いた
ものとたった1時間しか働かなかった者の報い
が同じだというのであるから、働いた者たちにと
っても、働かなかった者たちにとっても予想
に反した結果であった。

前に述べたように、常識に反した内容によ
って聴衆の興味をかきたてるというのは、イエス
の語りではよく見られる傾向である。「御国はパ
ン種のようなものだ」(マタイ13:33他)とか「金
持ちが天国に行くのは、らくだが針の穴を通る
よりも難しい」(マタイ19:23-24他)とかいう
ことばは、聴く者を驚かせる。ここに取り上げ
た「ぶどう園の労働者たち」もこういった特徴
を持っている。また、ぶどう園主の行動を繰り

返しによって示していることも口伝の証である。

内容的にも、人は何をどのくらいしたかによ
って自分の報いを評価するが、神の報いは人間
の行為によって左右されるのではないという考
えはイエス特有のものである。よって、セミナ
ーはこれをイエス自身のことばと考えたのであ
る¹²⁾。ただ、ここで、このたとえのあとにくる結
辞「後の者は先になり、先の者は後になるであ
ろう」は、このたとえの意味するところとは、
ずれている。この文言自体は、他の福音書でも
見られ、おそらくイエスのことばであろうとさ
れているが、違う文脈で、あるいは単独で、載
せられていて、解釈も異なっている。マタイは、
「ぶどう園の労働者たち」のたとえに「早く来
た者(ユダヤ人)より、後から来た者(キリス
ト教徒)の方が天国へ早く入る」という解釈を
与えるために、この結辞を持ってきたのである。
しかし、イエスのたとえは「神は人間のなしえ
た業績によって人間を評価するのではない」と
いうことを語っていて、マタイの解釈とは一致
しない。

さて、「よいサマリア人」と「ぶどう園の労働
者たち」は、当時の因襲的価値観に反すること
を語りのけていること、偏見の対象であるサマ
リア人や、仕事にあふれた人を神に祝福された
人としたことで、セミナーはイエス真正のこと
ばと評価している。

5. む す び

ここではイエスの「たとえ」のうち、マタイ
13章の主体であり、「御国をたとえと」として
一括できるもの、および、ルカに特有な「よい
サマリア人」と、マタイに特有の「ぶどう園の
労働者たち」を取り上げた。セミナーは福音書
の中のイエスのことばのうち82%はイエスによ
るものではないと判断しているが¹³⁾、「たとえ」
に限っていうと37話のうち、断定、推測を含め
てイエスが本当に語ったとされるもの(第一、
第二分類)は22話、そして後世の改変、創作に
よるもの(第三、第四分類)は15話となっている。
つまり、相当数のイエスのたとえは、イエ
ス自身のことばであると考えられる。

また、ルカにのみ特有なたとえが14話もあり、
そのうち8話が、イエス自身のことばか、およ

らくイエスのことばであろうと判定されている(表2参照). 他の福音書と共通するたとえを含めて、ルカはなぜ多くのたとえを採用しているのであろうか。ルカ自身はもともと異邦人であり、ルカ福音書がマルコやマタイと比べて異邦人を含めた幅広い読者層を対象に編集されていることと関係しているのかもしれない。

ここで結論として「たとえ」について次のことを再確認しておきたい。

- (1) たとえの中にはイエスが語ったものと編集者が創作、改変したものがある。
- (2) 一つのたとえの中でもそれが福音書によって少しずつ違っていることから、口承の過程、Qが編集されたとき、そして各福音書の成立時に改変があったことはまず疑いない。結果として、その改変が行われた時代背景、それを担った人たちの思想が反映している。
- (3) そのたとえ自体に改変はなくても、その前後にまったく違う文脈を加筆することで、元の意味とは違った意味を持つたとえになっているものがある。

次に、セミナーがどういう基準でイエスのことばの判定を与えているのかをまとめておきたい。今回扱ったたとえにおいても、古くからのことわざに独自の解釈を与えることで衆目を引き、簡単に印象的な事例を使って意外性のある展開にする、具体的で生き生きした表現を使う、問いかけのみで答えを与えないなどが、イエスの語りの特徴として、評価の基準になっている。さらに内容的にも、虐げられた者への無条件の愛、人間の因襲的価値判断の無意味さ、神の意志のみによる支配を語っていることや、終末論的差別化をイエスに帰さないことなどが、イエス真正のことばとしての判定基準になっている。

ところで、このようなイエス真正のことばの探索は、すでに触れたように、トマスの福音書の発見とQ資料の再構築があったればこそその成

果であることも見逃せない。イエスの「ことば」研究は、聖書の教えを解体するものとして、これまでしばしば教会関係者の非難の対象となってきた。しかし、我々は、これによってイエスの思想をよりいっそう明確なものにし、イエス像をいきいきと浮かび上がらせることができると確信している。

文 献

- 1) 藤本十四秋, 名木田恵理子: 福音書における「イエス自身のことば」を探る (1)「山上の説教」から, 川崎医学会誌, 一般教養篇 24 (印刷中).
- 2) Funk R W, Hoover R W and the Jesus Seminar: The Five Gospels: The Search for the Authentic Words of Jesus, N.Y.: Scribner, 1996.
- 3) *ibid.* p. 191.
- 4) *ibid.* p. 505.
- 5) *ibid.* p. 485.
- 6) 聖書; 旧約, 新改訳, 東京: 日本聖書刊行会, 1992.
- 7) Funk R W et al., op. cit., p. 194.
- 8) *ibid.* p. 195.
- 9) *ibid.* p. 525.
- 10) *ibid.* pp. 196-197.
- 11) 荒井 献: 問いかけるイエス, 東京: 日本放送出版, p. 158, 1994.
- 12) Funk R W et al., op. cit., p. 225.
- 13) *ibid.* p. 5.

参 考 文 献

- 1) Kloppenborg J S, Meyer MW, Patterson S J and Steinhauser MG: Q Thomas Reader, California: Polebridge Press, 1990.
- 2) 荒井 献: トマスによる福音書, 東京: 講談社, 1994.
- 3) 新約聖書-Good News New Testament <新共同訳>, 東京: 日本聖書協会, 1996.
- 4) The Holy Bible, King James Version, N.Y.: American Bible Society, 1991.

